

同志社女子大学 学芸学部・現代社会学部・表象文化学部・生活科学部 2012  
過程の演習 新国語問題集アシスト【古文編】

次の文章を読んで後の間に答えなさい。

人知れず思へばうける言の葉もつひにあふせのたのもしきかな

これは、惟規のぶのりといふ歌よみの、女のがり、つかはしたりける歌なり。この歌の心は、もろこしに、呉松孝といひける人の、宮中の内より流れいでたる、川の流れにあそびけるに、詩を作りて書きたりける木の葉の、流れて下りけるを見つけて、とりて見れば、柿のみぢの赤かりけるに、詩を書きたりけると、思ひけるより後に、女の手と見えければ、いかなる人、作りて書きけむと、この人ゆかしさに、思ひになりて、すべきやうも覚えざりければ、その詩の和〔注 返事〕を作りて、おなじ柿の葉に書きて、その川の、水上に流しければ、九重のうちに、流れいりにけり。その後、恋きたびに、この柿の葉の詩を、とりいでて、泣くよりほかの事なかりけり。さて、年月をふる程に、かの、宮の内にうちこめられて、いたづらに年を送る女、このかず、あまりつもりぬれば、「いとほし。われをたのみて、いたづらに年を送る。いとほしき事なり」とて、少々をば、おのおの親に返して、をとこをもせさせむとて、返し給ひけり。その人に、かの松孝をば、むこにとりつ。松孝、柿の葉に詩を書きたる人のみ、恋しくて、いかにも、こと事せむとも覚えざりけれど、親のする事なれば、心にもあらで、むこになりにけり。この女の、思ふさまにて、あはれに心ぐるしかりければ、かの、あけくれ恋ひ悲しびけるも、やがて思ひ忘れて、ふる程に、女のいひけるは、「我が、物思ふ人のけしきにて見えしは、いかなる事ぞ。ねがはくは、われに隠す事なかれ」。松孝、答へていはく、「われ、昔、宮のほかにして、川の流れにあそびき。水の上に、木の葉のあるを見れば、女の手蹟しせきにて、ひとつの詩を書けり。それを見て、今日今に忘るる事なし。しかはあれど、君に、かく親しくなりて後、ことのほかに、思ひなぐさめるなり」といへり。女、これを聞きて、「その詩は、いかがありし。また、その詩の和かつくりたりし」といひければ、「しかありき」といらへければ、女、この事を聞くに、涙さきにたちて、契りのおろかならぬことを、知りぬ。「その詩は、みづからの詩なり。和の詩、わがもとにあり」といひて、おのおの、とりいでたるを見れば、互ひに、我が手にて見ゆるを見るに、おぼろげの契りには、あらざりけりといへる事を知りぬ。「そもそも、いかにして、われが詩をば得し」「この身、いたづらにして、月日を送る事を嘆きて、川のほとりにあそびき。いはのはざまに、流れとまりたる木の葉を見れば、ひとつの詩あり。もし、ありし我が詩を見ける人の、作れると思ひて、おきたりつるなり」とぞ申しける。これを聞けば、妹背のなからひ、さきの世の契りの、おろかならぬより、思ひよる事なれば、あし、よしとも、さだむべきにもあらず。

問

本文の内容と合致するものを次の中から一つ選べ。

- ① 呉松孝は退屈だったので、柿の葉に詩を書いて川に流すと、宮中から返事の詩が川を流れて送られてきた。その事態を運命と感じた。
- ② 呉松孝は約束を交わした女性以外と結婚しようとは思わなかったが、親の勧めである女性と結婚すると、その女性こそ結婚の約束をした女性その人だった。
- ③ 呉松孝は柿の葉の手紙の上だけで知り合いになった女性と結婚したいと周囲には語っていたが、何も知らない親に他の女性と結婚させられた。
- ④ 呉松孝はずっと昔、偶然手にした川を流れてきた柿の葉の手紙を大切にしまっており、思いを書いた手紙を上流から流したが、その手紙も偶然その女性の手もとに届いた。二人はそれが理由で結婚した。
- ⑤ 呉松孝は親の勧めで気の進まない結婚をしたが、なんとその女性が彼が結婚したいと思っていた女性だった。

【解説】

◇本文の構成

惟規が女に送った和歌

⇨ 唐土の故事に着想を得たもの。

唐土の故事

⇨ 呉松孝が漢詩の書かれた柿の葉を川で拾う。

漢詩⇨女性の筆跡

⇨ 柿の葉の女性に恋をした松孝は、返事を書いて川上から流す。

⇨ その後、松孝は親の勧めによってある女性と結婚する。

⇨ 松孝が柿の葉の女性のことを妻に話す。

妻の答え

⇨ その漢詩は自分が作ったもの。

⇨ 松孝の返事も持っている。

⇨ 親の勧めで結婚した妻が、実は、柿の葉の女性であった。

【現代語訳】

人に知られないようにあなたを想っていたので、たまたま承るお言葉も結局は逢瀬につながるものと頼みにしていることですよ。

これは惟規という歌人が、女のもとに、届けさせた歌である。この歌の発想は（次の故事に基づいている）、唐土で、呉松孝といった人が、内裏の中から流れ出ている、川の流れに興じていたところ、（誰かが）漢詩を作って書きつけた木の葉で、（川を）流れ下ってきたのを見つけて、（松孝が）拾いあげて見てみると、紅葉した柿の葉で赤くなった葉に、詩が書いてあるなあと、思ったすぐ後に、女性の筆跡と見えたので、いったいどのような女性が、（この詩を）作って（木の葉に）書いたのだろうかかと、この女性に心ひかれて、恋心になって（しまつて）、どうしたらよいかわからなくなったので、その漢詩の返事を作って、同じ柿の葉に書いて、その川の、上流から流したところ、（その葉は流れに運ばれて）宮中の内に、流れ入って行った。その後、（柿の葉の女性を）恋しく思うたびに、この柿の葉の漢詩を、取り出して、泣くよりほかのことはなかった。さて、年月が経つ間に、あの、宮中にこめられて、むなしく年月を過ごす女房たちの、その人数が、あまりに多くなつてしまったので、（帝は）「かわいそうだ。私を頼りとして、むなしく年月を過ごしている。気の毒なことだ」とおっしゃつて、（女房たちの）若干名を、それぞれの親元に戻して、（よい）男性と結婚させようとして、（親元にお返しになった。その一人が、あの松孝を、婿に迎えた。松孝は、柿の葉に漢詩を書いた女性だけが、恋しくて、なんとしても、恋する人以外と結婚しようとは思ひもなかったけれど、親が取り計らうことなので、本意ではなくて、（その女性の）婿になつてしまった。この（結婚した）女性は、（松孝の）望みどおりに従い、（松孝は、ほかの女性に心ひかれているのが）しみじみと（この妻となつた女

性に対して) 気の毒に思われたので、あの、寝ても覚めても恋い慕い(逢えないのを) 悲しんでいた(柿の葉の) 女性のことも、すぐに思い忘れて、過(こ)している時に、妻が言うには、「私が、あなたが物思いに沈んでいると思われたのは、どういう理由ですか。どうか、私には隠さないでください」。松孝が、答えて言うには、「私は、昔、内裏の外で、川の流れに興じた(ことがあった。水の上に、木の葉が浮かんでいて(その葉を) 見ると、女性の筆跡で、一つの漢詩が書いてあった。それを見て、(その女性を) 今日ただ今まで忘れることはなかった。だが、あなたと、このように親しくなった後は、意外にも、心が慰められるのだ」と言った。女は、このことを聞いて、「その(柿の葉の) 詩は、どうしましたか。もしや、その詩の返事を作ったではありませんか」と言ったところ、「そのとおりでないことと答えたので、女は、このことを聞くと、涙が先立って、(松孝との) 宿縁が並みひとおりだ」と答えた詩は、私の手元にあります」と言って、(妻と夫) それぞれが、取り出した柿の葉を見ると、互いに、自分の筆跡だとわかることを知ると、(自分たち夫婦は) 並ひとおりの宿縁では、なかったのだといったことを悟った。(松孝が) 「いったい、どうやって、私の詩(＝返事) を入手したのか」(と言うと、妻は) 「私は、むなしく、月日を送っていることを嘆いて、(宮中の) 川のそばで逍遙していました。(川の) 石の間に、流れ着いていた木の葉を見てみると、一つの漢詩が書いてあります。もしかしたら、かつて(書いて流した) 私の詩を見た人が、作ったものだろうかと思って、取っておいたのです」と申し上げた。これ(＝故事の一部始終) を聞くと、二人が夫婦となったのは、前世からの宿縁(約束) が並々でなかったために心ひかれたことなので、(現世で結ばれたこと自体を)、悪いとも、良いとも、決めるべきではないのである。

#### 【解答】

- ⑤ 松孝は、「柿の葉に漢詩を書きつけた女性ばかりが恋しくて、ほかの事(＝ほかの女性との結婚) をしようとは思わなかったけれど、親の決めたことなので：婿になった」。また、妻の「その漢詩は私が書いたものです。返事は私の手元にあります」という会話から、親の取り決めた結婚相手は、男がずっと恋しく思い続いていた柿の葉の女性であることがわかる。
- ① 「呉松孝は退屈だったので、柿の葉に詩を書いて川に流すと」が×。呉松孝が「川の流れに興じていたところ、漢詩の書かれた葉で、川を流れ下ってきたのを見つけ」たので、最初に柿の葉に詩を書いて流したのは松孝ではなく、女性だとわかる。
- ② 「約束を交わした女性」が×。松孝は柿の葉に書かれた漢詩を見て女性に恋をし、一方的に返事を書いて川に流したのであって、二人は直接手紙をやりとりしているわけではない。
- ③ 「周囲には語っていた」が×。「柿の葉の女性を恋しく思うたびに、この柿の葉を取り出して、泣くよりほかのことはなかった」とあるので、松孝はこの女性のことを心の中で恋しく思っていただけだとわかる。
- ④ 「二人はそれが理由で結婚した」が×。「親が取り計らうことなので、本意ではなくて、その女性の婿になってしまった」とあり、この結婚は親が決めたことで松孝の意に反したものであることがわかる。

【作品（作者）解説】

『俊頼髓脳』は一一一一年から一一一五年ごろに成立した歌論書。作者は源俊頼。歌体・秀歌例・表現技法・歌語の由来など、和歌に関する内容が様々な視点から記されている。説話や伝承などを多く記載しており、「今昔物語集」の出典としても用いられる。

源俊頼（一〇五五？～一一二九年？）は平安時代後期の歌人。当代歌壇の権威として自由で率直な歌を詠んだ。白河院に「金葉和歌集」を撰進。自身の和歌は「金葉和歌集」以下の勅撰和歌集に二百一首入集している。